

## H-9 高気圧酸素治療が有用であった 卵管留膿腫の一症例

喜納美津男<sup>1)</sup> 金城佐和子<sup>1)</sup> 永井りつ子<sup>1)</sup>  
小濱正博<sup>1)</sup> 砂川 元<sup>2)</sup>

〔<sup>1)</sup> 南部徳洲会病院 救急・高気圧治療部  
<sup>2)</sup> 南部徳洲会病院 産婦人科〕

高気圧酸素治療（以下HBO）は、感染の抑制、浮腫の軽減と言う点からさまざまな炎症性疾患において応用が期待されるが個々の疾患に対する有用性を示すのが容易ではなく、実際に適応されている疾患は限られている。今回われわれは、卵管留膿腫による腹膜炎及びこれに付随した麻痺性イレウスに対しHBOを行ったところ良好な結果が得られたので報告する。

症例は44歳女性、平成14年6月30日より心窩部痛が出現し次第に下腹部に局限してきたため翌日入院となった。入院時白血球数、CRPの上昇及び腹部CTにて子宮右側に多房性の留膿腫を認めダグラス窩に液体貯留を認めた。さらに小腸の拡張と液体貯留も認めた。右卵管留膿腫及び麻痺性イレウスと診断、保存的に加療を行う方針とし抗生剤治療の投与に加えHBOを開始したところ症状は次第に改善し11日目に退院した。卵管留膿腫は、急性卵管炎で管腔の閉鎖がおり、そこに膿が貯留することで発生する。原因菌はブドウ球菌、グラム陰性桿菌が最も多い。急性期には炎症に対して抗生物質を中心とした治療を行い炎症症状が改善されなかった場合手術的に摘出が行われる。自験例においても急性期においては病変部の癒着が強く開腹手術はリスクが高いと判断し保存的治療を第一選択とした。局所と周辺組織の感染の抑制、付随したイレウスに対する治療として抗生剤治療に加えてHBOを行ったが開腹手術に至ることなく順調に回復した。

腹腔内炎症性疾患の補助的治療としてもHBOは考慮されるべき有用な手段の一つと考えられた。

## H-10 当院における高気圧酸素療法の現状

荒井 好範 和田 晃 忍田 欽哉

(牧田総合病院 脳神経外科)

【はじめに】2000年6月から本年8月まで救急適応疾患1148件、非救急適応疾患1001件の治療を行った。その現状と問題点につき言及する。

【稼働状況】2000年6月に第一種高気圧酸素治療装置1台を導入し治療を開始した。当院では日曜日も含め週7日体制で治療を行っている。今年8月までの2年2ヶ月間に治療を行ったのは2149件であった。そのうち1148件が救急適応疾患、1001件が非救急適応疾患であった。その中では、脳塞栓・頭部外傷・開頭術などによる意識障害が最も多く43%で、以下、イレウス36%、突発性難聴17%、急性脊髄障害4%であった。非救急適応疾患では、脳血管障害、外傷・開頭術による運動麻痺、循環障害が最も多く53%で、以下、難治性潰瘍を伴う末梢血管障害が28%、発症から7日以上経過した脳塞栓・頭部外傷・開頭術などによる意識障害が9%であった。依頼科としては脳神経外科が最も多く、次に内科、耳鼻科、外科の順であった。疾患別では脳塞栓症が最も多く、次に脳外科術後、突発性難聴、イレウスの順であった。治療中に問題があり、中止となった症例は5件で、すべて救急適応疾患であり、耳痛3例、呼吸不全1例、けいれん発作1例で、治療を途中で中止し、その後状態は落ち着き、問題はなかった。診療報酬請求(レセプト)上、救急、非救急合わせて7回以上の請求をすると4回から5回に査定されることが多く、最近では合計5回以下でも査定される可能性が高くなってきている。

【結語】当院は360床の総合病院であり、脳梗塞を含め救急患者の搬送が非常に多い。高気圧酸素治療は積極的に導入し、可能であれば発症当日から治療を開始している。第一種装置である為、意識障害の強い患者、呼吸状態の悪い患者などには治療を行うことが難しく、第一種装置の限界と考えられる。